

巻頭論文



国立教育政策研究所
教育課程研究センター 総括研究官

有元秀文

☐プロフィール

昭和46年早稲田大学国語国文学科卒業
東京都立新宿高等学校教諭
文化庁文化部国語課国語調査官
国立教育研究所教科教育研究部主任研究官を歴任。
平成13年1月から国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部総括研究官

著書

「相互交流のコミュニケーション」が授業を変える
(明治図書) / 子どもの「読む力」を引き出す読書
へのアニメーション入門 (学研) / 子どもが必ず本好きになる16の方法 実践アニメーション (合同出版)

豊かな心とたくましい体を
育てるための、自尊心と
コミュニケーション

1 豊かな心とたくましい体を育てるための自尊感情

さいたま市が「豊かな心とたくましい体」を学校教育の指針の一つとしたことはすばらしい。学力低下は深刻な課題だが、学力を気にかける余り、「心と体」を軽視し学力一辺倒になると、心と体の様々な問題が生じるだろう。持続する教育は、極端から極端に揺れ動くのではなく、バランスの取れた中道を歩まなければならない。

豊かな心、たくましい体、確かな学力の基礎は、自尊感情である。自尊感情とは、自分が大好きで、自分をそのまま受け入れ、いつも自分をほめたたえる感情である。マラソンの有森裕子は「自分で自分をほめて上げたい」と言ったが、これが自尊感情である。「どん底を見た後に、もう一回夢を持つことで、必ず結果ができることを伝えたい。」と宣言して、高橋尚子は東京国際女子マラソンに優勝した。くじけないで明るく希望を持って努力し続ける人たちは、必ず自尊感情が高い。

自尊感情の高い子どもは少々の失敗でもへこたれない。希望を持って前進するからますます自尊感情が高くなる。自尊感情の低い子どもは失敗すると落ち込み、腹が立つと人に当たり、努力できないからますます自尊感情が低くなる。

能力の高い子は、普通は自尊感情が高いが必ずしもそうではない。2003年のOECDの国際調査で、日本は数学の平均得点が6位で1位グループだが、「数学でひどい成績をとるのではないかと心配になる」高校生は66%いる。この比率は、アメリカは日本より約2割低く47%である。しかし、実はアメリカの平均得点は、40か国中28位と、日本よりはるかに低いのである。これは、日本の子どもは成績がよいのに自尊感情が低く、アメリカの子どもは成績が低いのに自尊感情が高いからだと考えられる。なぜこんなことが起こるのだろう。それはアメリカの子どもは小さなことでも誉めて育て、日本の子どもは叱って育てることが多いからではないか。

2 自尊感情を育てる相互交流のコミュニケーション

どんな子どもでも、必ず自尊感情を高めることができる。そのためには、先ず大人が、次のような「相互交流のコミュニケーション」を心掛ける必要がある。

- ①大人が、子どもをそのままに受け入れて、頭ごなしに否定したり批判したりせず、いつも暖かな態度で接し、どんな小さな事でも子どものよいところを見つけて、具体的に子どもの心に届くように確信を持って、繰り返し心から誉める。

②大人が、子どもの人権を大切に、序列化したり差別したりせず、どんな子どもの個性も尊重して寛容に接することによって、子どものお手本になり、子ども同士もお互いに認め合い励まし合えるような家庭や学級や学校の雰囲気築く。

わけもきかずに叱りつけるような教育を今の子どもたちにぶつけると、子どもたちは反発したりふさぎ込んだりして、返ってやる気を削いでしまう。叱られたり、駄目だと言われ続けている子どもは自尊感情が低く、何をやっても自信がなく最後までやり通すことができない。これからは、このような古い教育を転換して、大人と子どもの心が通い合う相互交流のコミュニケーションの中で、子どもを受け入れ、よいところをたくさん心から誉めて、自尊感情を高める教育に変えていく必要がある。

その前に、大人自身が自尊感情を高める必要がある。自分のよいところを紙に書き出してみよう。いつも心の中で自分を誉める習慣をつけよう。暗い後ろ向きの考えを振り払い、常に明るく前向きに考える習慣をつけよう。そのためには、家庭や職場の中で、お互いを尊重しあい、よいところを誉め合い、いじめやパワーハラスメント（職権による人権侵害）が絶対のない明るく暖かな相互交流が行われることが必要である。

3 どうしたらたくましい体、豊かな心、確かな学力を育てられるか

たくましい体とは何だろうか。筋骨隆々でも、暴飲暴食する人をたくましいとは思わない。たくましい体とは、高齢になっても人に迷惑をかけず、しなやかに人生を楽しめる体だと思う。私は30年以上ジョギングを続けている。雨の日は傘を差して歩く。ほとんどエスカレーターには乗らず階段を使う。高齢で精神的に活動していらっしゃる森光子さんや日野原重明さんのように、この人生を楽しみきりたいからである。

「平成16年度体力・運動能力調査」によると、9歳男子の「立ち幅とび」は、20年前と比較すると13センチ低下している。休日は外で思い切り遊ばせないで、体力のない子どもばかりになって、この国は成り立たなくなる。基礎体力があるから内臓も頭脳も活発に働くのである。

基礎体力を高めるためには、何よりも運動を好きにさせることである。どんな子どもにも興味深く楽しい授業を工夫し、「体を動かしてよかった」という成功体験を積ませることである。厳しい体育の訓練を復活しても今の子どもたちはついてこない。体育でも、相互交流のコミュニケーションを通して、子どもたちの自尊感情を高める必要がある。大人が、「よくできたね」「上手だね」と誉め、子どもから「楽しかった」「またやりたい」と返ってくるのが相互交流のコミュニケーションである。

豊かな心は、相互交流のコミュニケーションに支えられている。例えば、「思いやり」は心の中だけでなく、暖かなコミュニケーションがなければ成り立たない。そのためには、先ず教師自らがお手本を示すことである。どんなことがあっても、頭ごなしに叱りつけたり感情を露わにしたりせず、子どもの気持ちを暖かく受け止め、どんな子どもにもいつも暖かく接していれば、相互交流のコミュニケーションが生まれ、子どもは自然に見習ってお互いに優しくなるものである。

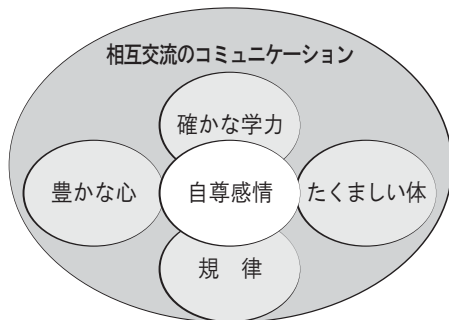
その時、忘れてはならないことは「規律」を徹底することである。怒鳴ったり怒ったりしても本質的な解決にはならない。学級の全員でよく話し合せて、「人が話しているときは邪魔しない」などの明快なルールを作り、違反した場合の適切な処罰も定める。ルールを作った以上は徹底して守らせる毅然とした態度が、教師にも学校にもなければ、相互交流のコミュニケーションは成立しない。

国際調査PISAでは、読解力の得点が低下したことが大きな問題になった。この読解問題は、読んだことについて「自分の意見を根拠を挙げて論理的に表現する」ことが要求される。これができないと国際社会で相互交流のコミュニケーションができない。日本の得点が低い要因は、多くの高校生が「論理的な表現」ができず記述問題を無解答で提出したからである。その理由は、日本の学校で意見発表や討論の機会が少ないからである。これからは、学校でも受験でも、計算や暗記だけでなく、本・新聞・インターネットなど多様な情報源から読んだことについて、自分の意見を表現し、討論を通して課題を解決する学習が重視されなければならない。これからの「確かな学力」には、どの教科でも論理的に表現し討論するコミュニケーションが必要である。

新学力観という言葉が余り耳にしなくなったが、子どもの興味・関心を最も重視する子ども中心の新学力観は、自尊感情を高めるために不可欠である。PISAの結果を生かし、読んだことについて表現できるよう新学力観をさらに拡充する必要がある。

最後に、このような考え方に立った学習モデルを示そう。図のように、自尊

自尊感情を核とした相互交流の学習モデル



感情は、「たくましい体」と「豊かな心」と「確かな学力」の基盤である。これらは、大人と子どもがお互いに尊重し合う相互交流のコミュニケーションによって達成される。

このような学習を成立させるためには、暖かな相互交流の中にも毅然として「規律」を守る教育が必要である。